

## I 不登校児童生徒への支援の基本的な考え方

### ○ 不登校児童生徒への支援の視点として

- ・不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること
- ・不登校の時期が休養等の積極的な意味を持つことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益、社会的自立へのリスクが存在することに留意すること

### ○ 学校教育の意義・役割として

- ・学校という場は、多くの人たちとの関わりの中で、様々な体験や経験を通して、実社会に出て役立つ生きる力を養う場であり、学校教育を受ける機会、周囲の児童生徒と交流や切磋琢磨する機会を得られないことにより、当該児童生徒が将来にわたって社会的自立を目指す上でリスクが存在すること
- ・既存の学校教育になじめない児童生徒については、学校としてどのように受け入れていくかを検討し、なじめない要因の解消に努める必要があること
- ・発達支持的生徒指導として、全ての児童生徒にとって、学校・学級が安全・安心な居場所となるようにすること

### ○ 支援の方向性

- ・不登校の背景にある要因を多面的かつ的確に把握し、早期に適切な支援につなげる必要があることから、不登校児童生徒の気持ちを理解し、思いに寄り添いつつ、アセスメントに基づく個に応じた具体的な支援を行うこと
- ・不登校支援は、学校の中だけで完結するものではなく、コミュニティ・スクールの仕組み等を活用し、家庭や地域及び関係機関等との連携・協働を緊密にし、児童生徒の健全育成という広い視野から地域全体で取り組む「社会に開かれた生徒指導」として推進を図ることが重要であること

### ○ 支援の目標

- ・不登校児童生徒への支援の目標は、将来、児童生徒が精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送ることができるような、社会的自立を果たすこと
- ・ここでいう社会的自立は、依存しないことや支援を受けないということではなく、適切に他者に依存したり、自らが必要な支援を求めたりしながら、社会の中で自己実現していくこと
- ・支援の第一歩は、将来の社会的自立に向けて、現在の生活の中で、「傷ついた自己肯定感を回復する」、「コミュニケーションカやソーシャルスキルを身に付ける」、「人に上手に SOS を出せる」ようになることを身近で支えること

○ 多様で適切な教育機会の確保

- ・不登校児童生徒の学びの場として、校内教育支援センター、市町村の教育支援センター、学びの多様な学校\*（いわゆる不登校特例校）、民間のフリースクール等があり、そこでの学びを、一定の要件の下、校長の判断により指導要録上の出席扱いとすることで、児童生徒個々の状況に応じた学びを保障するような支援を実現することが望ましいこと
- ・高等学校についても、全日制高校に加え、定時制高校や通信制高校などもあり、複数の登校スタイル（朝昼夜の三部制や制服の有無など）や多様な課程・コース（進学・国際・理美容・声優ほか）を選択できるという学校も多く、高校からの再スタートを模索する道も多様であること
- ・高等学校に行けなくても、高等学校卒業程度認定試験を受けて大学に行くという道もあり、個に応じた多様な社会的自立に向けて目標の幅を広げた支援を行うことが重要であること

○ 校種間の引継ぎ

- ・幼稚園・保育所・認定こども園、小学校、中学校、そして高等学校という校種間の移行期は、不登校児童生徒への支援においても極めて重要であること
- ・それまでの支援が途切れ一から支援の在り方を模索するのではなく、児童生徒理解・支援シート等を活用し、校種を越えた切れ目のない支援の実現が求められること

○ 家庭や保護者への支援

- ・保護者に対する個別面談で、丁寧に保護者の不安や心配事を聴き取ることにより、保護者が抱えるネガティブな感情を吐き出し、肩の力を抜くことができれば、児童生徒への関わりが改善し、結果的に児童生徒に好ましい変化が見られる場合もあること
- ・当事者視点で語られる経験は同じ悩みを抱える保護者の大きな支えや前進力となるため、親の会や保護者同士の学習会を紹介するなど、保護者を支えることが、間接的に不登校の児童生徒への支援につながる

○ 関係機関等との連携体制

- ・多様化する不登校に対しては、学校だけの力では十分な支援が難しくなっていることから、不登校児童生徒が何に困っているのか、どのような関わりを必要としているのかを正確にアセスメントし、適切な支援につなげることが重要であること

---

\*不登校児童生徒を対象とした特別の教育課程を編成して教育を実施する学校